

## 『シカゴ詩集』にみた

## カール・サンドバーグの特色

木村 淳子

## I

*Poetry: A Magazine of Verse* <sup>(1)</sup> が 1914 年の 3 月号に、カール・サンドバーグの “Chicago” をはじめとする 9 篇の詩を世に紹介したとき、それらの捲きおこしたセンセーションは非常に大きなものであった。特に “Chicago” <sup>(2)</sup> は *Poetry* 誌によって紹介された詩のうちで、最も大きな衝撃を世に与えた詩であった。この時以来、貧しい移民の子であり、無名の一新聞記者にすぎなかったサンドバーグは、最もアメリカ的な詩人として、また、ホイットマンの跡を継ぐ詩人として知られることになった。

2 年後の 1916 年の 4 月に、ニューヨークのヘンリー・ホルト社から、*Poetry* 誌に発表された詩篇を含む 149 篇の詩からなる『シカゴ詩集』が出版され、カール・サンドバーグの詩人としての地位は一応固まることになるのであるが、この詩集に対する新聞、雑誌等の批評、あるいは世間一般の受け取り方は、実にさまざまであった。<sup>(3)</sup> 一方では口を極めて賞讃するものがあり、他方では、一読の価値すらない、およそ詩と呼べるような代物ではない、とこきおろすものがいた。サンドバーグが世に問うた作品は、これまで人々が「詩」と考えていたものからは、程遠いものであったのである。彼は、労働者や、下層の人々が使う粗雑な、荒々しい言葉を詩の中に取り入れたのであったし、これまでの美しい詩が持っていたスタイルや、詩作上の約束事を無視して、極めて自由なスタイルでシカゴの街のすべて、そこに住む人々の姿をうたったのである。彼を賞讃するものにも、けなすものにも、この自由奔放さは全くの驚異に他ならなかった。上品な伝統を

## 20 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

守る人々が彼の詩に憤ったのも、新しい時代の空気にふれようとする人々が彼の詩の中に、これまでのものとは全くちがった新しい美を見出し、それに驚嘆したのも、当然のことであった。

カール・サンドバーグは1878年1月6日に、オハイオ州ゲイルズバーグで、貧しいスウェーデン系移民の子として生れた。父は鉄道工員で、家計をたすけるためにカールは、13歳で学校をやめ、その後は中西部で子供にできるあらゆる仕事につき、17歳頃からは放浪の生活に入った。彼が従事した仕事は数えたてるときりがない程であるが、例えば、床屋の小僧、芝居小屋の道具係、大道の物売り、ホテルの皿洗い、煉瓦工場のトラックの運転手、農場の手伝い等であった。彼の下積みの生活が、労働者や零細な貧民達に対する同情の基礎を培ったと云えるであろう。1898年に米西戦争が始まると志願兵となり、プエルトリコに8ヶ月間駐在した。この時故郷の新聞に書き送った手紙が、はじめて活字になった。除隊後、ゲイルズバーグのロンバードカレッジに入学、ここでサンドバーグはその文学的教養の一切を摂取した。彼にはハイスクールの教育課程が欠けていたので、正規の学生とはならなかったのであるが、ロンバード在学中は、スポーツや文芸方面のクラブ活動に華々しい活躍をみせ、たまたま大学新聞に寄稿した作品がフィリップ・グリーン・ライト教授の目にとまり、教授はサンドバーグの文才を認め、これを鼓舞し、1904年に出版した処女詩集 *In Reckless Ecstasy* の出版の費用のめんどうまでみてくれた。この詩集は世間の注目を惹くには至らず、詩人としてのカール・サンドバーグが世に現れるには、なお10年の歳月を経なければならなかった。サンドバーグは、4年間のロンバード生活の後再び放浪生活をはじめ、ミルウオーキーに流れて行って新聞記者として仕事を得たが、生活は安定しなかった。やがて、1908年に  
(4)  
リリアン・ポーラ・スタイクンと結婚した。当時のふたりは社会民主党員 (Social Democrats) として、貧しい労働者達の味方として働いていた。

その後、党の方針と己れの志向するものが一致し難くなったときに、ふたりは黨員として働くことをやめてしまった。しかし、サンドバーグの社会主義的な傾向は生涯かわらなかった。こうした彼の姿勢から、サンドバーグは社会派の詩人であると考えられて来た。

さて、20世紀初頭のアメリカの詩は、前世紀にすでにホイットマンとディッキンソンという偉大な先人達を持ちながら、これ等の先人達の跡は継がずに、依然としてヴィクトリア風の上品な、趣味的なものがもてはやされていた。小説の分野に於いてはすでにリアリズムが起り、詩はリアリズム小説の大きな影の中にかくされて輝きを失っていた感があった。しかし、リアリズムの風潮は次第に詩の分野にも影響を与えはじめてきており、ウィリアム・ヴォーン・ムーデー、ブリス・カーマン、エドウィン・マーカム等の詩人達は、リアリスティックな詩の先駆者となった。こうした新しい詩への動きの中で、1912年にシカゴに於て、ハリエット・モンロウは、*Poetry: A Magazine of Verse* を創刊し、ここにいわゆる“Poetic Renaissance”が華々しく展開しはじめたのである。*Poetry* 誌は、その後約半世紀にわたって、さまざまの困難に耐えて生きながらえ、アメリカの詩壇に大きな功績を果たした。多くの秀れた詩人達が紹介されたこと、特に郷土の若い詩人の育成に力を注いだこと、英米の詩人達の交流に力を貸したこと、これによってアメリカの詩は、英国の詩の中から養分を得て育ったとも云えるのであるが、また、イマジズムの運動を広めたこと、これまで看過されて来た、エマソンやディッキンソンに対する関心を、特にイマジズムとの関連に於いて、呼びおこしたこと、等が挙げられよう。カール・サンドバーグは、*Poetry* 誌によって育てられた、最も秀れた詩人の一人である。

当時のシカゴは新興の意気に燃える、活気にみちた都市であった。経済的にも一応の安定をみ、しかも旧来の伝統にとらわれることのないこの都市に世界中から人々は集まり、新しい芸術の波は大西洋を越えて、この都

## 22 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

市にも押し寄せて来ていた。こうしたシカゴに於いて *Poetry* が創刊され、新しい詩の運動が始まったことは十分に意義深いことであった。

サンドバーグは、1916年の『シカゴ詩集』につづいて、1918年には『ともろこしの皮をむく人々 (*Cornhuskers*)』を出版してピューリッツァ賞を受け、20年には『煙と鋼 (*Smoke and Steel*)』、22年には『日に灼ける西部の石片 (*Slabs of the Sun-burnt West*)』が出され、初期の詩業は一応確立された。

サンドバーグは、中期から詩作よりはもっと別の分野に関心を持つようになった。すなわち、彼は郷土の偉人、アブラハム・リンカーンの伝記に力を注ぎ30年を費やして、6巻からなるリンカーン伝を完成した。1926年に *Abraham Lincoln: The Prairie Years*, 2巻、1939年には、*Abraham Lincoln: The War Years*, 4巻を出版して、これによりピューリッツァ歴史賞が与えられた。その他に児童のための物語や詩を書き、自分で国内各地を歩きまわって地方の民謡を集め、これを *The American Songbag* に編んだ。1948年にはサンドバーグ唯一の小説 *Remembrance Rock* を出し、1950年には *Complete Poems* がハーコート社から出版され、ピューリッツァ賞が与えられた。

カール・サンドバーグは1967年7月22日に89歳で亡くなった。彼は *Complete Poems* につけた序文の終りで、次のように述べている。

It could be, in the grace of God, I shall live to be eighty-nine, as did Hokusai, and speaking my farewell to earthly scenes, I might paraphrase: "If God had let me live five years longer I should have been a writer"<sup>(5)</sup>

北斎のように89歳まで生きながらえて、やがて、この世に別れを告げねばならぬ時がきたら、私は次のように云うであろう、「もし神がもう5年生きることを許してくれたら、私は、ものを書く人間として生きた

であろう」と。

しかし、彼のこうした言葉にもかかわらず、晩年のサンドバーグは詩人としての活動はほとんどしていなかったようで、事実上は、1950年の *Complete Poems* をもって詩人としての活動はおわったと考えられるようである。

## II

カール・サンドバーグは、「シカゴ派」との関連や、その生い立ち、放浪生活、あるいは社会民主党員としての活動などから、これまで多く、社会主義的な、プロレタリアの詩人とみなされて来た。「シカゴ派」と云うのは、当時シカゴに集まった詩人、作家達のグループで、その中には、シャーウッド・アングスン、セオドア・ドライサー、フロイド・デル、ベン・ヘクト等が顔をそろえ、サンドバーグもその一員であった。彼等は当時の刷新的な空気の中で、社会改革の気運を盛り上げるのに力を貸した。新興都市シカゴは、発展途上の希望に燃える、エネルギッシュな都市であると同時に、発展の陰の数多くの矛盾をはらむ都市でもあった。『シカゴ詩集』は、シカゴのすべてをうたった詩集であり、空をつく摩天楼の狭間に細々と生きている人間達をうたった詩集である。この詩集の中では、サンドバーグは、貧しい人々、労働者達の代表であり、擁護者であり、代弁者である。“To a Contemporary Bunkshooter”の中で彼は、偽善者の、見せかけばかりの信仰を持つ説教家に、荒々しい言葉で批難をあびせている。

You come along……tearing your shirt……yelling about Jesus.

Where do you get that stuff?

What do you know about Jesus?<sup>(6)</sup>

きみはやって来る……シャツをひきちぎり……キリストの名を呼ばわ

24 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

りながら。

きみはその言葉をどこで手に入れたのか。

キリストについて何を知っているのか。

この説教家と云うのは、当時有名な、ピリイ・サンデイで、サンドバーグがサンデイを嫌ったのは、そのまやかしものの、口先ばかりの信仰のためであった。

I've read Jesus' words. I know what he said.<sup>(7)</sup>

ぼくはキリストの言葉を読んだ。キリストが何と云ったか、よく知っている。

I know how much you know about Jesus.<sup>(8)</sup>

ぼくにはきみがキリストについてどれだけ知っているか、よくわかっている。

サンドバーグにとってキリストとは、貧しい大工の伴、貧しい人々の中に生活する、貧しい人々の代弁者に他ならなかった。零細な民衆の生活の実情を見ることなく、いたずらにキリストに従え、と説く説教家は、民衆の友であるどころか敵に他ならなかった。

I won't take my religion from any man who never works except  
with his  
mouth and never cherishes any memory except the face of the  
woman on the American silver dollar.<sup>(9)</sup>

ぼくは口先でしか働いたことのない、銀貨の上の女性の顔しかいつくしんだことのない人間から信仰を得ようとは思わない。

サンドバーグは貧しい人々を背後にかばいながら、金持の銀行家や資本家の手先のような説教家に、激しい言葉をもってぶつかって行く。“A Fence”はサンドバーグの社会主義的な意識を説明するのによく引き合いに出される詩であるが、この中にも富める者と貧しい者との対照が明らかである。

(10)  
A Fence

Now the stonehouse on the lake front is finished and the workmen  
are  
beginning the fence.

The paling are made of iron bars with steel points that can stab  
the life  
out of anyman who falls on them.

As a fence, it is a masterpiece, and will shut off the rabble and  
all vaga-  
bonds and hungry men and all wandering children looking for a  
place to play.

Passing through the bars and over the steel points will go nothing  
except  
Death and the Rain and Tomorrow.

垣 根

湖畔の石造りの家はもう仕上って、職人たちは垣根にとりかかっている。

柵は鉄棒、尖端は鋼である。その上に倒れたら、どんな人間も一突きでおしまいだ。

垣根としてはこの上もない傑作、暴徒も浮浪者も、空き腹かかえた人間も、遊び場を探す子供たちも寄せつけない。

26 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

鉄柵をくぐり、鋼の尖端をのり越えて入ってくるのは  
死と雨とあしただけ。

頑丈な鉄柵は、また、細民達に対して開かれぬ富者の心でもあろうか。冷酷な鉄柵を越えて入って事る死、雨、あした、は、どんな人間にも等しく訪れるのであり、どんな人間も決してまぬがれることのできぬものなのである。最後の一行のアイロニーがこの詩を引きしめている。“Muckers”<sup>(11)</sup>という詩の中では、つらい土方の仕事と、それを眺めている人々をうたっているのであるが、汗にまみれて、泥を掘り返す土方の仕事を、何とひどい仕事だろうと感じる人々と、このような仕事でも、仕事があるということはうらやましいことだ、と考える失業中の人々との対照的な姿がある。

『シカゴ詩集』146篇の中には、以上あげた詩にみられるような社会意識の強い詩が多いのであるが、これ等の詩と、彼がロンバード時代に、ライト教授や友人達とマルクスの『資本論』を読み合っていたという事実や、社会民主党の運動員であったこと等を考えあわせるとき、カール・サンドバーグを社会主義的な詩人の系列に組み入れることは、極めて容易なことである。しかし、サンドバーグが本質的に持っていたものは、こうした公式的な図式的なものではなかったようである。彼の民衆への共感、彼が生来持っていたものから湧き上るのであり、それがより世間的で、実際的なものと結びついたときに社会民主党への傾倒となって現れたのである。彼の本性が求めるところを實際面で追求して行こうとするとき、社会民主党員であることは非常に適切な方途であったのである。カール・サンドバーグは、せまい意味での社会派の詩人ではなくて、広く人生の哀歎をうたった抒情詩人である、と云うことができるであろう。彼の詩人としての本質を抒情詩人としてのサンドバーグのうちに見出すときに、『シカゴ詩集』の中に見られる、短かくて、優しい詩を理解することが可能になってくるのであるし、荒々しく、はげしい表現を持つ詩もまた、容易に理解するこ



とができるのである。

さて、ここで、カール・サンドバーグに本質的であるものを名づけて「優しさ」と呼ぶことにしたい。「優しさ」は、人によっては「愛」と呼ぶかもしれないし、他の場合には「思いやり」と云いあわすこともできようし、少し言葉をかえて「感受性」などと呼ぶこともできよう。“sympathy”, “sensitivity”, あるいは “sensibility” などと云いあわすことも可能であろう。ひとりの人間の持っている特質、あるいは本質を、ただひとつの言葉によって表現すること、ひとりの人間をただひとつの色で塗りつぶしてしまうことは全く危険で、無謀なことではあるが、あえてサンドバーグの本質を「優しさ」という言葉で表現してみたい。「優しさ」という言葉にあらわされる彼の本質は、その対象に向ったときに、さまざまな色合い、色調に変化して読者に提示されるのである。それは、ちょうど、「あか」とか「みどり」とかの名称で呼ばれる色が、明暗と濃淡の変化によって、数限りない「あか」や「みどり」の色相をみせてくれるのと同じであろう。いくつかの詩の中に、さまざまな色合いの「優しさ」を眺めてみたい。

Hog Butcher for the world,

Tool maker, stacker of wheat,

Player with Railroads and nation's Freight Handler;

Strong, husky, brawling,

City of the Big Shoulders:<sup>(12)</sup>

世界の豚屠殺者

道具の作り手、小麦の積み上げ手、

鉄道の賭ばく者、国の荷役人、

頑丈な、がらがら声の、怒鳴りちらす、

でっかい肩の都市

## 28 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

この有名な詩行で始まる“Chicago”は、その言葉づかひの卑俗さや、韻やリズムといった詩作上の約束事をすべて無視した自由律によって、当時の読者に大きなショックを与えた。まず冒頭の“Hog Butcher for the world”の一行だけでも、当時の読者の度胆を抜くのに充分であったことであろう。それに加えてサンドバーグは、この詩を労働者達が日常使っているような言葉でうたいあげたのである。さまざまの、漸新な手法上の試みがなされている今日では、読者は手法上の新奇さには動じなくなっているのであるが、この詩を声を出して読むときに、おのずから生れて来るリズムに気づかすにはいられない。そして、そのリズムの底に脈々と打つ何かを感じずにはいられないのである。それは、荒々しい粗野な言葉の中にひそむ情感であろうし、サンドバーグ自身の胸のうちにこみあげてくる感激なのであろう。H・シュトラウマンは、その著書『アメリカの文学——二十世紀の思潮』の中で、“Chicago”は、「彼、サンドバーグが大いに共通するところを持っていた、ドス・パソスの小説にみられるニューヨークの描写をのぞけば、合衆国のどの都市を歌ったものよりもはるかにすばらしく、「偉大な肩をもった都市」の真髓をありありと描きだしており、ためにこの詩集の華となっている」と言っている。

この詩の中でサンドバーグは、己れの都市の悪いところをも決して否定することなく受け入れている。この都市は、いかがわしい街の女が、純朴な農村出身の青年を誘惑する都市であり、ならず者が我物顔に横行する都市であり、貧しい人々は飢えに悩まされる都市である。こうした悪いところをすべて認めた上で、サンドバーグは嘲笑者に向って、なお誇ることのできる自分の都市を示すのである。シカゴは、若々しい情熱と、荒々しい力を秘めた、大声に叫び、わめき、笑う都市である。

Under the smoke, dust all over his mouth, langhing with white  
teeth,

Under the terrible burden of destiny laughing as a young man laughs,  
 Laughing even as an ignorant fighter laughs who has never lost a  
 battle,  
 Bragging and langhing that under his wrist is the pulse, and under  
 his ribs  
 the heart of the people,  
 Laughing. /

Langhing the stormy, husky, branwling laughter of Youth, half-  
 naked,  
 sweating, proud to be Hog Butcher, Tool maker, stacker of  
 wheat.

Player with Railroads and Freight Handler to the Nation<sup>(13)</sup>

煙の下、口じゅうほこりだらけにして、白い歯をみせて笑っている。  
 運命の恐ろしい重荷の下で、若者のように笑っている。  
 決して敗れたことのない無智な拳とう家のように笑っている。  
 肩をゆすり、笑っている、その手首には脈拍が、肋骨の下には民衆の  
 心があるのだ。

笑っている。

嵐のような、しわがれ声の、騒々しい若者のような笑いを、半身裸に  
 なって、汗にまみれ、豚屠殺者、道具の作り手、小麦の積み上げ手、  
 鉄道のパク者、国の荷役人であることを誇って、笑っている。

<sup>(14)</sup>  
 "They Will Say" という短い詩の中で、サンドバーグは、「ぼくの都市  
 の悪いところは、子供たちを太陽と露から遠ざけ、彼等を壁と壁の間に閉  
 じ込め、ほんのわずかの給料のために喉にほこりをのみ込んで、心臓をか  
 らにして死ぬようにさせることだ」と言っている。サンドバーグはシカゴ  
 の悪いところを決して看過してはいない。しかも、彼はこの都市を誇りに

30 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

している。大草原の只中に、忽然と生れ出たように、またたく間に発展して行ったシカゴには、アメリカの各地からばかりでなく、世界のあらゆる地方から人々が集まり、彼等の働きによって、巨大な摩天楼が次々に立ちならび、工場が建設され、資本家達は莫大な金力によって大きな産業をおこして行った。シカゴは全く人間の力によって作り上げられた都市であった。いっぽう目を転じてみると、彼方には、こうした人為的なものには毒されていない大草原が広がる都市でもあった。

By day the skyscraper looms in the smoke and sun and has a soul.  
Prairie and valley, streets of the city, pour people into it and they  
mingle  
among its twenty floors and are poured out again back to the  
streets  
prairies and valleys.<sup>(15)</sup>

日中、摩天楼は煙と太陽の中に姿を現わし魂を持っている。  
大草原や谷間、都市の街路はその中に人々を注ぎ出し、人々は二十の階に混じり合い、摩天楼は再び人々を街路や大草原や谷間にかえす。

人工的なシカゴのまちがサンドバーグを惹きつけるのは、それが人間の働きによって作り上げられたからに他ならない。鉄とセメントでできている、固い、冷たい摩天楼も人間の働きによって生命を与えられる。

It is the men and women, boys and girls so poured in and out  
all day

that give the building a soul of dreams and thoughts and memories.<sup>(16)</sup>

この建物に、夢と思想と記憶の魂を与えるのは、一日中注ぎこまれ、注ぎ出される男であり、女であり、少年であり、少女であるのだ。

林立する摩天楼の美しさは、それを完成した人間の美しさなのであり、それを作り上げるのに力を貸した人間、ひとり、ひとりの魂にあづかり、息づいている。サンドバーグのシカゴに対する愛は、それを築き上げた人間への愛に他ならない。彼の「優しさ」は、シカゴをうたうときには、打ち振られるハンマーの響き、大声に叫びあう労働者達の唸れ声と共鳴して、はげしい、高い響きを持ったものとなっている。

サンドバーグの「優しさ」は、摩天楼の狭間の裏街にくらす同胞たちに対するときに極まる。彼にとっては、下町のユダヤ人の魚売りも、暗い露地に身を潜ませている街の女も、土方もすべて同胞である。彼等は、かつて彼がその放浪の途上で袖をふれ合った仲間達であったかも知れない。あるいは同じ土から生れた、ある意味では、血を分けた兄弟達であったかも知れない。彼はこうした人々に、心からの共感を抱くことができた。それは決して無理に作られたポーズではなかったし、憐愍でもなかった。サンドバーグがシカゴのまちの貧しい人々をうたうときに持っていた最大の強みは、彼が対象とする人々を心から理解できた、ということである。

(17)  
Fish Crier

I know a Jew fish crier down on the Maxwell  
 Street with a voice like a north  
 wind blowing over corn stubble in January.  
 He dangles herring before prospective customers  
 evincing a joy identical  
 with that of Pavlowa dancing.  
 His face is that of a man terribly glad to be selling  
 fish, terribly glad that  
 God made fish, and customers to whom he may  
 call his wares from

a push cart.

魚 売 り

私は、トウモロコシの刈株の上を吹く一月の風のような声をした、マックスウェル街のユダヤ人の魚売りを知っている。

彼は見込みのありそうな顧客おとくいの前にニシンをぶらさげてみせる、おどるパブロワのよろこびと同じよろこびをみせながら。

彼の顔は魚を売るのがうれしくてたまらぬ人の顔だ、神様が魚をお創りになったのが、大声に呼ばわって手押し車から魚を売る顧客おとくいを作ってくれたことがうれしくてたまらぬ人の顔だ。

得意満面のユダヤ人の魚売りと、それを好ましげに眺めているサンドバーグの姿が、この短詩の中にうかがわれる。貧しい魚売りのよろこびは至ってささやかなものではあるが、満ち足りた幸福感がある。パブロワが、その偉大な芸術を披歴するときのよろこびに勝るとも劣らぬものである。それをうなずいて見ていることのできるサンドバーグの心のひろがり、優しさがある。

Used Up<sup>(18)</sup>

Lines based on certain regrets that came with rumination  
upon the painted faces of North Clark Street, Chicago

Roses,

Red roses,

crushed

In the rain and wind

Like mouths of women

Beated by the fists of

men using them.

O little roses  
 and broken petals  
 and petal wisps :  
 You that so flung your crimson  
 To the sun  
 Only yesterday.

使い果たされたもの  
 シカゴのノース・クラーク街の化粧した女の顔によって胸にこみあげ  
 た、ある哀惜の念によって書かれた詩

バラよ  
 赤いバラよ  
 雨と風に  
 打ちひしがれて  
 相手の男のこぶしで  
 たたかれた  
 女の口のように。  
 おお、小さなバラよ  
 ひきちぎられた花びら  
 花びらの断片  
 あのように真紅の色を  
 太陽に向ってひろげたのも  
 ほんのきのうのことだったのに。

暗い夜の中に立つ女の濃く塗られた口びるは、ふみにじられたバラの花  
 びらを連想させる。太陽に向って、幸福に輝やっていた日もあったであろ  
 うに。サンドバーグが哀れな人々に対して抱く感情は「あわれみ」ではな  
 い。「あわれみ」を抱くには、彼はあまりにも彼等に密着しすぎていたよ

うである。彼が貧しい人々に対して抱く共感の底には、非常に素朴で単純な、それ故に純粹でもあり得る信仰が流れている。彼が人間を愛するのは、どの人間も同胞なのだからであり、人間と言う一つの大きな家族の中の兄弟であるからなのである。こうした考え方の根底にあるのは「神」の存在であり、人間の上により大きな存在を見出すことによって、人間の平等性、人間の尊厳が明らかになってくるのである。サンドバーグの場合には、「神」はごく狭い、キリスト教的な解釈による「神」ではなくて、もっと幅の広い、汎神論にまで達してしまうような「神」の観念があるようである。さて、互いに兄弟である人間のひとりが苦しみに喘ぐときには、共にその苦しみを味わわねばならないし、重荷を負って行く者があればその重荷は共に担って行くのが兄弟であるもの達の責任、義務である。兄弟のひとりが石を投げつけられたときには、石を拾って向って行かねばならない。サンドバーグの同胞愛はこのようなものであり、彼の極めて荒々しい詩のいくつかは、同胞に対する愛が、その敵対者に向ったときの怒りの表現なのである。そして、このような荒々しい詩も、そのはげしさにもかかわらず、単なる怒号におわらぬのは、サンドバーグのうちにある素朴な愛情のためであったであろう。

サンドバーグは、*Complete Poems* の序の中で次のように言っている。

Many of the older poets, such as Villon and Herrick and Burns, used the whole of their personal life as their material, and the verse written in this way was read by strong men, thieves, and deacons, not by little cliques only.

昔の多くの詩人達、例えば、ヴィヨンやヘリックやバーンズは、彼等の個人的な生活のすべてを詩の素材として用いた。このようにして書かれた詩は、少数の愛好家ばかりでなく、頑強な人々、人達、僧職の人々にも読まれた。



シカゴの貧しい人々の日常の言葉で書かれた詩は、題材ばかりでなく、その読者をも、こうした人々に求めていたのではなからうか。シュトラウマンは「かれは、けっして傑作といわれる詩を数多く書いてはいないかもしれない。しかし、出版されて人々から嫌悪されるようなものは断じて書かなかった<sup>(19)</sup>」と言っている。『シカゴ詩集』におけるサンドバーグの態度が肯定的であり、時に楽天主の様子をさえみせるのは、人間には本来生きる権利がある、と同時に、生きねばならぬ義務もあると知っていたからではないだろうか。しかも、彼は貧しい、素朴な人々の暮らしのうちにこれを学んだのであった。彼はすべてをありのままに受け取り、すべてを肯定する。彼の人間に対する信頼は、どのようなときにも変ることがなく、時にはセンチメンタルとさえ言える程である。

サンドバーグの「優しさ」が、まわりの風物に赴くとき、それは感受性の強さとなってあらわれてくる。街はずれにひろがる湖の波も、シカゴの雑踏の外側をとりまく大草原の風も、空も、霧も、裏庭に照る月も、すべてが彼の心を捉え、心をふるわせる。そこから美しい抒情詩が生れた。

<sup>(20)</sup>  
Sketch

The shadows of the ships  
 Rock on the crest  
 In the low blue lustre  
 Of the tardy and the soft inrolling tide.

A long brown bar at the dip of the sky  
 Puts an arm of sand in the span of salt.

The lucid and endless wrinkles  
 Draw in, lapse and with draw.

Wavelets crumble and white spent bubbles  
Wash on the floor of the beach.

Rocking on the crest  
In the low blue lustre  
Are the shadows of the ships.

スケッチ

船の影  
波がしらに揺れる  
ゆっくりと静かにまき返す汐の  
青い沈んだ光沢のなか。

空の傾斜に長い茶色の棒が  
汐のひろがりに砂の腕をさし込む。

透明なやむことのない襞が  
寄せてはもどり退いて行く。  
さざ波は砕け、白く消えかかる泡末は、  
なぎさの床を洗う。

沈んだ青い光沢のなか  
波がしらに揺れる  
船の影。

静けさを伝えてくれる詩である。船の影をうつして揺れる波がしらにゆれているのは、サンドバーグ自身の心でもあろうか。

(21)  
Fog

The fog comes  
on little cat feet.

It sits looking  
over harbor and city  
on silent haunches  
and then moves on.

## 霧

霧が来る  
小さな猫の足どりで。

静かに腰をおろして  
眺めている  
港やまちを  
それから行ってしまふ。

イマジズムの影響が濃いと言われる有名な詩である。サンドバーグの抒情詩は、対象を迎え入れて高まる心の震動であろう。こうした抒情詩に現われるのは、社会派の詩人、サンドバーグではなくて、非常に感覚的な抒情詩人、サンドバーグである。彼は自然を自らの心をうちあける相手としてうたっている。その場合、彼の詩は、ややもすると甘い、センチメンタルなものになってしまう傾向がある。これが詩そのものを、弱々しく、小さなものにしてしまっているのは惜しいことと言わなければならない。特に詩の中に社会派の詩人としてのサンドバーグの姿を求めるときに、甘い涙が視点を漠とした、あいまいなものにしてしまっていることに気がつく。しかし考えを少し変えてみると、苦難の、泥まみれの生活のうちにも、甘

### 38 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

やかな、物に感じやすい心が失なわれなかったことは幸いなことであった、と言わねばならぬかも知れない。Poetryによって育てられた、同時代の他の二人の詩人達、ヴェイチェル・リンゼイと、エドガー・リー・マスターズに抜きん出た詩人となしたのは、この抒情性によるものであったからである。サンドバーグの詩風は、時を経るに従って、激しいものからおだやかなものへと変化して行っているが、題材や思想的な方面における発展はみられない。後期に至っては神秘主義的傾向を濃くしている。これは発展というよりは、むしろマイナスの効果をもたらすものと考えられている。

カール・サンドバーグは社会派の詩人、プロレタリアの詩人、と呼ばれるよりは、むしろ、社会的傾向を持つ抒情詩人であると言われるのがふさわしいのではなからうか。

## III

サンドバーグは、ホイットマンの跡を継ぐ詩人であると考えられている。彼がホイットマンに傾倒していたことはよく知られた事実であり、ホイットマンの持っていた吟遊詩人の精神はサンドバーグのうちにも生きている。また、そのスタイルを考えてみると、ホイットマンと同様にサンドバーグも、好んでフリーヴァースを採用し、庶民の生活を庶民の言葉でうたい上げている。カタログングの手法や、命令法の詩が多いことなど、ホイットマン的要素が多いのであるが、その中で特に大切なことは、カール・サンドバーグもまた“American identity”，即ち、アメリカ或はアメリカ人とは如何なるものであろうか、を追求していたことである。自身もスウェーデン移民の子として生れたカール・サンドバーグにとって、祖国アメリカとは両腕でしっかりと抱きかかえていなければならぬものではなからうか。英語の下手な父親と、“Carl”という、およそアメリカ人らしからぬ名を持ち、身のまわりには、耳になじみのない外国語の聞えるアメリカ中西部に暮して、こうしたすべての脈絡のないものをひとつにつなぎとめる何

かがサンドバーグにとって、またアメリカ人すべてにとって、必要であったであろう。

サンドバーグは、その学校生活の間じゅう“Charles A. Sandburg”と名乗り、彼の最初の詩集はこの名によって出版されている。彼の“American Identity”の追求の努力は、後年の *The People, Yes* に、あるいは祖国アメリカの運命を決めた偉人、アブラハム・リンカーンの伝記の中に、あるいは自ら歩きまわって集めた *The American Songbag* の中に結実している。サンドバーグが真にアメリカ人らしいアメリカ人と考えられ、アメリカの国民詩人と称えられることになったのには、「彼が正真正銘のアメリカ人でなかったがためである」という、非常に大きなパラドックスがあるのである。

註(1) 1912年にシカゴに於て創刊された。この雑誌名に関して次のようなことが言われている。即ち同義語が反覆的に使用されているのは、創刊者、ハリエット・モンロウが、詩についての作品ではなく、詩、そのものに第一義的な興味を持っていたことを明らかにするものである。

(カンリッフ、アメリカ文学史・刈田元治訳参照)

(2) 1914年11月には、*Poetry* 誌初のレヴィンソン賞が、この詩に与えられた。

(3) *The Dial* 誌は、“This man was gross, simpleminded, sentimental, sensual,”であり、“a mystical mobocrat”であると評した。批評家の William Stanley Braithwaite は *Boston Transcript* に於て、Sandburg の“tenderness”と“Visual strength”とを認めながらも、*Chicago Poems* は“a book of ill-regulated speech that has neither verse nor prose rhythms”と評した。一方ニューヨーク・タイムズは比較的好意的であったし、ハリエット・モンロウやエイミー・ロウエル、ルイス・アンターマイヤー等もサンドバーグを賞讃した。

(4) ポーラは後にニューヨーク国立美術館の写真部長となった、エドワード・スタイケンの妹である。

40 『シカゴ詩集』にみたカール・サンドバーグの特色

- (5) *Complete Poems* の序文参照
  - (6) *Complete Poems*, (以下 *C. P.* と略す) p. 29
  - (7) *ibid.*
  - (8) *ibid.*
  - (9) *ibid.*
  - (10) *C. P.*, p. 16
  - (11) *C. P.*, p. 10
  - (12) *C. P.*, p. 3
  - (13) *C. P.*, p. 3
  - (14) *C. P.*, p. 5
  - (15) *C. P.*, p. 31
  - (16) *ibid.*
  - (17) *C. P.*, p. 9
  - (18) *C. P.*, p. 61
  - (19) H・シュトラウマン, 斎藤数衛訳, アメリカの文学
- 二十世紀の思潮——
- (20) *C. P.*, p. 4
  - (21) *C. P.*, p. 33